

技術的複製可能性の時代に おける芸術作品——第一稿

ヴァルター・ベンヤミン

訳 = 竹峰義和

〔訳者解説〕 ここに訳出したのは、『ヴァルター・ベンヤミン新批判版全集』第16巻に収録された「技術的複製可能性の時代における芸術作品」の「第一稿」(Walter Benjamin, »Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit—Erste Fassung«, in: Benjamin, *Werke und Nachlaß. Kritische Gesamtausgabe*, Band 16: Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit, hg. von Burkhardt Lindner unter Mitarbeit von Simon Broll und Jessica Nitsche, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2012, S. 7-51)である。

これまでベンヤミンの複製技術論文は、1972年から1999年にかけて刊行された『ベンヤミン全集』(Benjamin, *Gesammelte Schriften*, hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Bände I-VII, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1972-1999)所収の3つのヴァージョン(1935年10月から同年12月にかけて成立した「第一稿」、35年12月から36年2月にかけて成立した「第二稿」、39年3月から4月にかけて成立した「第三稿」)、および36年に成立したピエール・クロソフスキーによる第二稿のフランス語訳の計4つのテキストが知られてきた。さらに、各ヴァージョンに関連するメモ書きや異稿、抜き書きが、『ベンヤミン全集』のそれぞれの収録巻の註釈の欄にまとめて記載されている。

それにたいして、2008年から刊行が開始された『新批判版全集』には、合計で5つの複製技術論文のヴァージョンが収録されている。すなわち、これまで知られてきた4つのテキストに加えて、これまで「第一稿」と見なされてきたヴァージョンの成立に先立って執筆された草稿が新たな「第一稿」として加えられたのである(それに応じて、旧『全集』の「第一稿」は「第二稿」に、「第二稿」は「第三稿」に、クロソフスキーの仏訳が「第四稿」に、「第三稿」が「第五稿」となっている)。今回訳

出したのがまさにその新たな「第一稿」であるが、そこには旧『全集』には収録されなかった複数の断片的なテキストが含まれているほか、ベンヤミンが草稿のなかに書き入れた数字や記号、挿入句、抹消箇所などがオリジナルの遺稿に可能なかぎり忠実に復元されている(さらに、『新批判版全集』では、書き入れられた文字の色——ベンヤミンは改稿の際に何色かの万年筆を使い分ける習慣があった——や、挿入句や数字などが記された正確な位置などについても註ですべて明記されているが、膨大な数にわたるためにこの翻訳では割愛した)。

原稿は8×11.5センチの大きさの合計28枚のメモ帳の裏表に、基本的に黒インクで文字が記されている。翻訳にあたっては、『新批判版全集』の表記をある程度踏襲するかたちで、ベンヤミンによる短い挿入句は「 」で、長めの文章が挿入される箇所は干などで(ただし、挿入されるべきテキストが欠落している場合も複数ある)、編者による挿入は〈 〉で、解読不可能な文字は〈x〉で、解読不可能な語ないし語の一部は〈X〉でそれぞれ記した。また、訳者による挿入は〔 〕で記した。左端に付けられた横線のうち、短いものは節と節の切れ目を、長いものは用紙の切れ目をそれぞれ表している(中央に位置する横線は、ベンヤミンが書き入れたものである)。他の数字や記号、斜線——斜線が引かれている箇所は、抹消ではなく、別の稿に活用したことを示している場合がほとんどである——についてはすべてベンヤミン自身の手によるものであり、版面を組むにあたっては『新批判版全集』の表記をできるだけ再現するように努めた。註は基本的にすべて訳註であるが、適宜原註を参照・活用した。

この複製技術論文の「第一稿」がベンヤミン研究にとってもつ最大の意義は、このテキストをもとに複製技術論文を構想していたベンヤミンの思考の展開の過程をたどることが可能になったことである。たとえば仏訳を除く他のすべてのヴァージョンの冒頭に置かれたマルクスの上部構造と下部構造をめぐる序論はここにはなく、芸術受容における「気散じ」をめぐる記述が他のヴァージョンに比べてかなり前の方に登場してくるなど、複製技術論文を織りなすさまざまなモチーフのなかでどれがベンヤミンの最初期の着想に含まれていたのかをここから再構成することができる。また、のちの各稿に反映されることのなかった記述の数々——たとえば、リラックスした芸術受容がガレージに入るときの感覚に喩えられる箇所や、チャップリンの身振りの新しさをめぐる箇所——や、末尾の文献リスト、命題一覧もまた、複製技術論文の理解をさらに深める手助けとなってくれるだろう。